慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『平家物語』と笛 : 巻第九「敦盛最期」の形成をめぐって
Sub Title	
Author	佐谷, 眞木人(Saya, Makito)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1990
Jtitle	三田國文 No.13 (1990. 6) ,p.33- 42
JaLC DOI	10.14991/002.19900600-0033
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19900600-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『平家物語』と笛

――巻第九「敦盛最期」の形成をめぐって――

佐谷眞木人

一の谷の合戦において熊谷直実が平敦盛を討った話は、『平家物語』の中でも有名な場面の一つである。「覚一本」は、敦盛は笛の名手であり、さ枝と呼ばれる笛を最期まで離さなかったと記している。このことは若くして死にゆく貴公子への哀感をより一層高める効果を持っているといえよう。しかし、この場面は諸本の間での異同が大きく、中には敦盛が持っていたのは篳篥であったとする本も存在する。本稿では、それら諸本の異同を比較・検討した上で、「覚一本」の本文が形成されていった道筋について、一つの考えを提示してみたい。

一

「覚一本」巻第九「敦盛最期」は、平敦盛の笛について次のように記している。(1)

良久しうあッて、さてもあるべきならねば、よろい直垂をとッて、頸をつゝまんとしけるに錦の袋にいれたる笛をぞ腰にさゝれたる。「あないとおし、この暁城のうちにて管絃し給ひつるは、この人々にておはしけり。當時みかたに東國の勢なん万騎かあるらめども、いくさの陣へ笛もつ人はよもあらじ。上臈は猶もやさしかりけり」とて、九郎御曹司の見参に入りたりければ、是をみる人涙をながさずといふ事なし。後にきけば修理大夫經盛の子息に大夫敦盛とて、生年十七にぞなられける。それよりしてこそ熊谷が發心のおもひはすゝみけれ。件の笛はおほぢ忠盛笛の上手にて、鳥羽院より給はられたりけるとぞ聞えし。經盛相傳せられたりしを、敦盛器量たるによッて、もたれたりけるとかや。名をばさ枝とぞ申ける。狂言綺語のことはりといひながら、遂に讃佛乗の因となるこそ哀なれ。

（傍点引用者、以下同）

傍点部にあるように、ここでは平敦盛は「さ枝」と呼ばれる笛を持っていたとされている。一方、同じく「覚一本」巻第四においては、高倉宮以仁王もまた「小枝」（こえだ）と呼ばれる笛を持っている点が注意される。以下にその部分を抜き出してみよう。

長兵衛尉信連は、御所の留守にぞおかれたる。女房達の少々おはしけるを、かしここゝへたちしのばせて、見ぐるしき物あらばとりしたゝめんとてみる程に、宮のさしもご秘蔵有ける小枝ときこえし御笛を、只今しもつねの御所の御枕にとりわすれさせ給たりけるぞ、立かへッてもとらまほしうおぼしめす、信連これをみつけて、「あなあさまし。君のさしも御秘蔵ある御笛を」と申て、五町がうちにおッついてまいらせたり。宮なのめならず御感あッて、われしなば、此笛をば御棺にいれよ」とぞ仰ける。

（巻第四、「信連」）

同廿三日の暁、宮は「この寺ばかりではかなうまじ。山門は心がはりしつ。南都はいまだまいらず。後日になッてはあしかりなん」とて、三井寺をいでさせ給ひて、南都へいらせおはします。此宮は蟬をれ・小枝ときこえし漢竹の笛をふたつもたせ給へり。かのせみをれと申は、昔鳥羽院の御時、こがねを千両宋朝の御門へおくらせ給たりければ、返報とおぼしくて、いきたる蟬のごとくにふしのついたる笛竹をひとよおくらせ給ふ。「いかゞこれ程の重寶をさうなうはゑらすべき」とて、三井寺の大進僧正覚宗に仰て、壇上にたッて、七日加持してゑらせ給へる御笛なり。或時、高松の中納言實衡卿まいッて、この御笛をふかれけるが、よのつねの笛のやうにおもひはすれて、ひざよりしもにおかれたりければ、笛やとがめけん、其時蟬をれにけり。さてこそ蟬をれとはつけられたれ。笛のおん器量たるによッて、此宮相傳ありけり。されどもいまをかぎりとやおぼしめされけん、金堂の弥勒にまいらさせおはします。龍花の暁、値遇の御ためかとおぼえて、あはれなッし事共也。

（巻第四、「大衆揃」）

しばしあって兵物共の四五百騎、ざゞめいてうちかへりける中に、浄衣きたる死人の頸もないを、しとみのもとにかいていできたりけるを、たれやらんとみたてまつれば、宮にてぞ在ましける。「われしなば、この笛をば御棺にいれよ」と仰ける、小枝ときこえし御笛も、いまだ御腰にさゝれたり。

（巻第四、「宮御最期」）

以上、巻第四、「信連」「大衆揃」「宮御最期」の三箇所から、高倉宮が「蟬折」「小枝」の二本の笛を持っており、「蟬折」は三井寺の弥勒に奉納し、小枝は死ぬまで離さなかったことがわかる。巻第九の平敦盛の記事とは、笛の名前が「さ枝」（敦盛）・「小枝（こえだ）」（高倉宮）と類似するだけでなく、死後、腰にさしていた笛が発見される点や、笛が上手であったとする点も共通している。両者には何らかの関係があるのではないだろうか。

そこで、他系統の本を読みくらべてみると、平敦盛の遺品が必ずしも笛で統一されていないことに気が付く。例えば、「延慶本」では、次のように書かれている。(2)

熊谷泣々此殿を見れは漢竹の篳篥の色なつかしきを紫檀の家に入て錦の袋に入なから鎧の引合に指れたり、此篳篥をは月影とそ付られたりける、又少き巻物を差具たり（第五本、「敦盛被討給事付敦盛頸八嶋へ送事」）

ここでは敦盛は「月影」という名の篳篥と巻物を持っているのである。同じく「延慶本」の「覚一本」巻第四相当部分では、高倉宮は「此宮小枝蟬折と云秘蔵の御笛二あり」、「小枝と申し御笛を最期まで御身を放たれず、哀なりし御事也」（第二中、「宮蟬折を彌勒に進せ給事」）とあるから、ここでは「延慶本」と「覚一本」の記述はほぼ共通しているといってよい。つまり、高倉宮の持ち物は両本ともに「小枝・蟬折」という二本の笛であるが、敦盛の持ち物は「延慶本」と「覚一本」とでは異ってくるのである。

そこで、『平家物語』の代表的な諸本における高倉宮と平敦盛の記事を、遺品に着目して比較してみたい。比較した本は、当道系の諸本のうち、「覚一本」「百二十句本」「八坂本」の三種と、非当道系の諸本のうち、「延慶本」「長門本」「四部合戦状本」（以下、四部本）「源平闘諍録」（以下、闘諍録）「南都本」の五種の合計八種である。便宜上、「覚一本」の巻立て及び標題に合わせた。なお、闘諍録と南都本は巻四相当部分を欠いているため、高倉宮については比較できなかった。[3]

A、巻四（高倉宮）

「信連」
小枝の笛を持つもの　覚一本、百二十句本、八坂本
無名の笛を持つもの　延慶本、四部本、長門本

「大衆揃」
小枝の笛を持つもの　覚一本、百二十句本、八坂本、延慶本、四部本、長門本
蟬折の笛を持つもの　覚一本、百二十句本、八坂本、延慶本、四部本、長門本

「宮御最期」
小枝の笛を持つもの　覚一本、百二十句本、八坂本、延慶本、四部本、長門本

B、巻九（平敦盛）

「敦盛最期」
小枝の笛を持つもの　覚一本、百二十句本、八坂本
無名の笛を持つもの　四部本、南都本
篳篥を持つもの　延慶本、長門本、（闘諍録）
巻物を持つもの　延慶本、長門本、（闘諍録）
※「闘諍録」は熊谷直実に討たれたのは敦盛ではなく業盛であったとする。

この表からわかるのは、高倉宮の遺品に関しては諸本間の異同が小さいが、平敦盛に関しては異同が大きく、また、高倉宮と平敦盛の遺品を共に小枝の笛とするのは当道系の諸本だけで、非当道系の諸本にはそのような類似は見られないことである。当道系語り本のうち、最も古態を留めているとされる「屋代本」が、巻四・巻九を共に欠いているので、どの段階でこうなったのかはわからないが、少くとも「覚一本」では、何らかの本文上の混乱（それが意図的なものであったとしたら、必ずしも混乱という表現は適切ではないかもしれない）があって、高倉宮と平敦盛の笛の名の類似が起っているのではないか。

それでは、その当道系の諸本においては、平敦盛と高倉宮の笛の名は果して明確に区別されているのだろうか。以下に、この点に限

ってより詳しく比較してみたい。次の表は影印で見ることのできる語り本系の諸本十五種について、この二つの笛の名の記述をそのまま抜き出したものである。諸本の細かな成立の順序を論じるためのものではなく、全体の大まかな傾向をつかむためのものなので、順序は必ずしも成立が古いと考えられる順にはなっていないことをお断りしておく。(4)

	(高倉宮)	(敦盛)
1 百二十句本（斯道）	小枝	小枝
2 百二十句本（内閣）	小枝（コエダ）	小枝（コエダ）
3 小城鍋島本	小枝（サエダ）	小枝（サエダ）
4 八坂本	小枝	小枝
5 岡山大本	さえた	さえた
6 竹柏園本	小枝	篠・枝
7 平松家本	小枝（サエダ）	篠（ササ）枝（エダ）
8 鎌倉本	小枝	篠（ササ）枝
9 文禄本	小枝	小篠
10 覚一本	小枝（コエダ）	さ枝
11 真字熱田本	小枝	小（サ）枝
12 両足院本	小枝	左・枝
13 平曲正節	小枝（こえだ）	小枝（さえだ）
14 波多野流譜本	小枝（こえだ）	小枝（さえだ）
15 前田流譜本	小枝（こえだ）	小枝（さえだ）

以上検討した十五種の諸本のうち、両者を明確に区別しないのが1～5であり、敦盛の笛に篠という字を宛てているのが6～9、10以降は「覚一本」と同じく、高倉宮が「こえだ」、平敦盛が「さえだ」である。このうち12の「両足院本」は、高倉宮の笛をどう読むのかわからないが、敦盛の笛の名の「左枝」の左を仮名の「さ」の異体字とみると、覚一本とほぼ同じ表記になる。

全体を見渡してみると、両者は必ずしも明確には区別されていないようである。また、高倉宮の笛の表記は「小枝」でほぼ統一されているのに対し、敦盛の笛は表記が一定しておらず、揺れが大きいことがわかる。

そこで次に、『平家物語』の異本の一つである「源平盛衰記」の内容に注目してみたい。

まず、「覚一本」巻第四、「信連」に相当するのは、第十三巻「高倉宮信連戦事」であるが、そこには笛に関する記述は全くない。次に、同じく「大衆揃」に相当する部分は、幾つかの章段に分けられており、高倉宮が三井寺の弥勒に笛を奉納した話は「蟬折笛事」として独立した章になっている。そしてこの段で登場する笛は「蟬折」だけで、「小枝」については何も記されていない。また、「宮御最期」に相当するのは第十五巻「宮中二流矢一事」であるが、そこでは「覚一本」と異り、高倉宮は死後に遺体を発見されるのではなく、流れ矢に当ってお亡くなりになる場面が描かれている。このように内容が改められた結果、「源平盛衰記」においては高倉宮に関する記事の中に「小枝」の笛が一度も登場しないことになる。

次いで、「覚一本」巻第九「敦盛最期」に相当するのは、巻第三十八「平家公達最後並頸共掛二一谷一事」であるが、そこには次のように書かれている。

……色なつかしき漢竹の笛を、香もむつましき錦の袋に入て、鎧の引合に指れたり。（中略）彼笛と申は父經盛笛の上手にて御座けるが、砂金百両宋朝に被レ渡て、よき漢竹を一枝取寄、殊によき両節間を一よ取、天台座主前明雲僧正に被レ仰て、秘密瑜伽壇に立て、七日加持して、秘蔵して被彫たりし笛也。子息達の中には、敦盛器量の仁なりとて、七歳の時より傳へて持れたりけり。夜深る儘にさえければ、さえだと名附けられける也。

このように、敦盛は「さえだ」という名の笛を持っているが、それは父の経盛が宋に砂金を送って取り寄せた竹をもとに彫られたもので、敦盛の祖父の忠盛が鳥羽院から賜ったとする「覚一本」の記述とは異る。また、「さえだ」の名の由来も「夜が深けると音が冴えるためである」という全く新しい伝承を加えている。この結果、「源平盛衰記」においては、高倉宮と平敦盛の間で笛の名や伝承の類似が全く見られないのである。

このことは、当道系語り本における笛の名の類似を考える上で示唆的な事実であると思われる、「源平盛衰記」は『平家物語』の諸本のうちでも成立が遅く、恐らくは当道系語り本が成立した後に形成されたテキストと考えられるからである。その本文の中で、「さえだ」の笛が平敦盛の側に完全に取り込まれていることは「源平盛衰記」の作者が、先行するテキストにおける笛の名の類似を、記述上の混乱と受けとめたからに他ならない。敦盛と高倉宮の両方が「小枝」の笛を持っていることは、やはり訂正されるべき誤りであったのである。

では、なぜ「覚一本」をはじめとする当道系語り本だけが、このような笛の名の類似という本文上の矛盾を抱え込んでいるのだろうか。そのことを考えるために、非当道系諸本のうち、当道系に最も近い本文を持つ「南都本」の内容を検討してみたい。以下は「南都本」「敦盛最期」の結末部分である。(5)

……腰ヲキツト見レハ錦ノ袋ニ入レタル笛ヲソ指レタリケル。熊谷是ヲ見テ、御方二人多シト云共カク軍陣マテヤサシク笛モツ人ハヨモアラシ。今朝一谷ノ木戸口ニ笛ノ音ノ聞ヘツルハ此敦盛ニテ御座ケリトテ、イトヽ涙ニ咽ヒケリ。熊谷後ニ人ニ語ケルハ、直実坂東ニテ数ケ度ノ軍ニ合テ多ノ敵ニ組シカ共、一谷ニテ無官ノ大夫敦盛トカヤ名乗シ人二組タリシ程目モクレ心モ乱テ覚ヘシ事ハナシト常ハ申シ出テ涙ヲ流シケリ。是ヨリシテソ熊谷ハ発心ノ便ト成ニケル。

他の非当道系の諸本が笛（或いは篳篥）についてほんの僅かしか記さないのに比べて、この「南都本」ではかなり記述が詳しくなっており、また内容も、当道系諸本に近くなっている。さて、この段の最後が「是ヨリシテソ熊谷ハ発心ノ便ト成ニケル」と閉じられていることに注目したい。このような記述は、他の非当道系諸本にも見られるのである。例えば「延慶本」「敦盛被討給事並敦盛頸八島へ送事」の結末部分は次のようになっている。

是よりしてそ熊谷は発心の心をはおこしける、法然上人に相

奉て出家して法名蓮生とそ申ける、高野の蓮花谷に住して敦盛の後世をそ訪ける、難有ける善知識かなとそ人申ける。

また、「四部本」「敦盛最期」相当部分の結末は次のようになっている。

自レ其熊谷発心ッ後人ノ語出家ヲ籠高野時ニ所作次ニハ必奉ニ訪ニ此敦盛聖霊成仏得道ニ之聞

また、「長門本」では、同じ箇所は次のように閉じられている。

…熊谷是をみ、さては打いでたまひけるの日より、しぬべしとはかねて思ひまうけ給ひけるにこそと、かれを見是を思ふにもいとゞ涙もせきあへず、さてこそ熊谷が発心の心はつきにけれ、

「闘諍録」にだけは、これに類似した表現は見当らないが、それ以外のここに示した諸本はだいたい似たような表現で、この話を閉じているのである。そこで、再度、「覚一本」の結末部分を見てみると、

それよりしてこそ熊谷が発心のおもひはすゝみけれ。件の笛はおほぢ忠盛笛の上手にて、①鳥羽院より給はられたりけるとぞ聞えし。②経成相傳せられたりしを、敦盛器量たるによッてもたれたりけるとかや。③名をばさ枝とぞ申ける。狂言綺語のことはりといひながら遂に讃佛乗の因となるこそ哀なれ。

となっており、他本と同じように「それよりしてこそ熊谷が発心のおもひはすゝみけれ」と、ひとまず話を閉じたあと「件の笛は……」と、再び笛の話を語り出すあたり、話の続き具合が不自然である。実は、この部分は、「巻第四」の高倉宮の笛の話と内容が非常によく似ている。まず、傍線部①で、笛がもと鳥羽院のものであったとするが、高倉宮の「蟬をれ」も、もともと鳥羽院から下されたものであった。また②に、敦盛が笛が上手だったので、相伝したとあるが、高倉宮もまた、「笛のおんの器量たるによって、此宮相伝ありけり」と語られるのである。③において、笛の名が一致することは、前述のとおりである。

そうすると、この話は、もともとは「熊谷が発心の心を起した」と記したのち、「延慶本」や「四部本」のように、熊谷が高野山に登ったことを記すか、或いは「南都本」や「長門本」のように、そのまま話を打ち切ってしまうかの形であった可能性が強い。当道系語り本は、その部分を差し換えるか、付加するかして笛の話を記しているのだが、それは大部分、巻四の高倉宮の記述からの借りものなのである。

この当道系諸本の特徴を、最もよく表しているのが、最後の「狂言綺語のことはりといひながら、遂に讃仏乗の因となるこそ哀なれ」という一文であると思われる。この文章は、ことばを補いながら意味を取ってみると、「(管絃は)狂言綺語の理であるというけれども、(この敦盛の笛が熊谷の)発心の契機となったことこそ、すばらしいことである。」となるのではないか。

つまり『平家物語』の、当道系で言う「敦盛最期」の話は、当道

系、非当道系とも熊谷直実の発心譚として構成されているが、当道系諸本では特にそれが笛による発心であることが強調される形になっているのである。このような傾向は「南都本」にも見られるが、それがはっきりした形で顕れているのは、当道系諸本だけである。では、なぜ当道系諸本において、笛が問題になっているのであろうか。そのことを考えるために、「狂言綺語」ということばについて、検討を加えてみたい。

二

覚一本『平家物語』「敦盛最期」は、「狂言綺語のことはりといひながら、遂に讃仏乗の因となるこそ哀なれ」という言葉で閉じられている。この言葉には典拠があり、『白氏文集』巻七十「香山寺白氏洛中集記」に、「願　以今生世俗文学業狂言綺語之誤　翻　為当来世世讃仏乗之因転法輪之縁」とあるのがそれに当る。『和漢朗詠集』巻下、「仏事」にも採られており、意味は、「私は、今日に処るまで専ら世俗の詩文を作り、戯れ飾った言葉を弄んだ罪を特してきたが、この詩文を作る営みを転じて、これから先、永遠に仏法を讃嘆し演説する時の契機としたいと切望している。」となる。(6) つまり、この「狂言綺語」という言葉は、本来、詩文を指して言うのであって、音楽には当てはまらないものなのである。また、本来は詩文を作ることを否定する意味を持っている。しかし、この白楽天の詩が広く一般に流布するに及んで、意味が変ってくるのである。(7) 山田昭全氏はこの言葉について次のように述べておられる。

狂言綺言観は現世否定の浄土教と結びついている限り、それは文芸を罪悪視し、これと絶縁する方向をとらざるをえないのであるが、一方、言語を重視する密教の中に取り込まれてくると、讃仏讃法の詩歌ならむしろ積極的に肯定すべきだという論理に一転するのである。

（中略）

この論理はさらに「声塵得道」「声明成仏」というように、文芸ばかりでなく、音楽も成仏の機縁になるという考え方に発展する。『四季物語』に「仏は狂言綺語とか、かかるうつは（＝琴）の音には猶更心もきよらかなるべきを」とあるのは、そうした思想の一例である。

右の記述からもわかるようにこの言葉は、管絃が仏道発心や成仏得道の契機となる根拠として、中世において非常に重要な意味を持っていたと考えられる。「覚一本」では、「敦盛最期」の他にもう一箇所、巻第三の「大臣流罪」にもこの言葉が登場する。大政大臣藤原師長が、尾張国に流されて、熱田明神に参詣し、神前で琵琶をひき、朗詠をする場面である。(8)

やうやう深更に及んで、ふがうでうの内には花芬馥の氣を含み、流泉の曲の間には、月清明の光をあらそふ。「願くは今生世俗文字の業、狂言綺語の誤をもッて」といふ朗詠をして、秘曲を引給へば、神明感應に堪へずして、寶殿大に震動す

師長は「妙音院大臣」とも呼ばれ、琵琶の名手として知られる人物で、『保元物詩』や『今鏡』、『十訓抄』、謡曲『絃上』などにも説

話が見える。右の説話においても、この白楽天の詩句は、音楽の効徳を信仰に結びつける上で重要な役割を果していると考えられる。

また、この言葉は楽書の中に散見する。例えば、『教訓抄』巻第七「舞曲源物語」の中には次のようにある。[9]

凡ソ舞曲ノ源ヲタツヌレハ。佛世界ヨリ始テ。天上人中ニ。シカシナガラ。妓樂雅樂ヲ奏シテ。三寶ヲ供養シ奉テ。娯樂快樂スル業ナルヘシ。

（中略）

但狂言綺語ノタワフレナリトイヘトモ。如此佛神三寶ヲモ納受セシメ。鬼神ヲモタヒラクル事。餘道ニスクレタリ。狂言ノアソヒ。發心求道ノタヨリトナル。綺語ノ一興モ。世縁俗念ニワスレヲレハ。業障ノ雲ハレヌヘキワカ身ナリ。

また、『懐竹抄』は「可レ好レ笛事」として次のように記す。[10]

管絃ハ狂言戯事ナレドモ。法成熟之曲（就力）。見佛聞法ノ調ナル故。皆依二生前ノ宿縁一。又為佛神之御計。極道也。

『教訓抄』十巻は、わが国最古の総合的な楽書であり、作者の狛近真が天福元（一二三三）年、自筆をもって書写したとの奥書を有するので、その頃の撰述であろうと推測される。また、『懐竹抄』二巻は、著者、成立年とも未詳であるが、平安後期の笛の名手である大神惟季の口伝をもとにまとめた、笛に関する伝書であり、平安末から鎌倉初期にかけて編まれたものと推定される。[11]

右の二例からも、中世において、この「狂言綺語」ということばが、管絃（音楽）と信仰とをつなぐ、キータームになっていることがわかる、それは、音楽が信仰の道と通じることの根拠を説くために、欠かすことのできない表現だったのである。このように考えるとき、「敦盛最期」の結末部分は、別の意味を持ってこよう。それは、笛を契機・因縁として信仰の道に入ることを勧めていると、読むことが可能ではないか。そして、その背後には、どうも笛を媒介とした唱導が見え隠れするようである。

上野山福祥寺（通称、須磨寺）は神戸市須磨区にある真言宗の寺である。古くより「青葉の笛」と呼ばれる平敦盛の遺品の笛を持つことで知られている。現存する最古の笛の記録は、同寺蔵の古記録『当山歴代』の応永三十四年の記事である。[12]

爰亦留守物横笛一巻在、名於波小枝云、丹波国土田云人是取還、名物ト聞、国之重宝心得、是秘蔵ス、雖然、終不鳴云説在之気里、名所之名物南礼波土天付縁乞之、同国之祖木土云人也、同国高水寺云山寺不動坊所持也、強縁南礼波無力出乎、正長元年十月到来、然間同極月廿日陣開テ、堂内庄厳仮屋造作、行道如形修之、

右の記事によると応永三十四（一四二七）年、須磨寺の寺宝の笛が盗難に逢ったが、無事戻ってきたので、翌正長元（一四二八）年開帳した、ということになる。ここで注目されるのは、笛の名が現在伝わる「青葉」ではなく『平家物語』と同じ「小枝」となっていることである。また、この記事から推測して、須磨寺にはこれより

以前、恐らく南北朝期には敦盛の笛が伝わっていたものと思われる。

世阿弥作の謡曲『敦盛』は、やはり須磨の笛伝承をもとにしていると考えられる。シテである敦盛が、平家一門の昔日の栄光と敗北とを想い出して語る部分では、「立ち帰る春の頃、この一の谷に籠もりて、暫しはここに須磨の浦」「思ひを須磨の山里のかかる所に住まひして、須磨人になり果つる、一門の果てぞ悲しき」[13]とあって、「須磨」の地名が繰り返し登場するし、またこの作品が古くは「草刈敦盛」と呼ばれたことからわかるように、草刈笛の伝承と関りが深いのである。[14]

世阿弥の没年は嘉吉三（一四四三）年頃であるが、この『敦盛』は、応永三十（一四二三）年の奥書を持つ『三道』にその名が見えるので、成立はそれ以前ということになる。世阿弥が、既成の伝承をもとに作曲したと考える場合、もとになった伝承の形成はやはり南北朝期にまで遡りそうである。

したがって、「覚一本」が完成された応安四（一三七一）年の段階で既に、須磨には敦盛の笛伝承があって、それが「覚一本」の内容に影響を与えている可能性があるのである。例えば「覚一本」「敦盛最期」において、「（敦盛の笛を）九郎御曹司の見参に入たりければ、是をみる人涙をながさずといふ事なし」とあることは、何らかの形で笛の展観が行なわれていたことを想像させる。

室町時代に須磨寺で制作されたと考えられる室町時代物語に『須磨寺笛之遺記』と題するものが存在する。その中に「義経（小枝の笛を）拝領し、願ひの如くに一通の状を相そへて、今度戦場の所福祥寺にそ残し置かれける。其状云、……」とあって、義経が書いたという書状を載せる。もちろん『平家物語』をもとに後世に創作されたものであろう。が、この場面で本来登場する必然性のない義経を登場させているのが『平家物語』の諸本のうちでは当道系語り本だけであることを考え合わせるならば、義経という有名な人物を登場させることによって、笛の権威づけを図るという意図を、もとになった『平家物語』からよみとることも可能ではないか。そのように考えると、前述の、巻第四の高倉宮の笛の名を取り込んだ理由も理解し易いと思われる。「覚一本」をはじめとする当道系語り本の巻第九「敦盛最期」は、敦盛の笛に対する信仰の高まりに影響されつつ形成された可能性が高いのである。

注

（1）以下、覚一本『平家物語』の本文は、日本古典文学大系『平家物語』（岩波書店、一九五九、六一年）に拠っている。

（2）本文は『応永書写延慶本平家物語』（勉誠社、一九七七年）に拠る。

（3）以下のテキストを使用した

「百二十句本」新潮日本古典文学集成『平家物語』（一九七九～八一年、新潮社）

「八坂本」『平家物語付承久記』（国民文庫刊行会、一九一一年）

「長門本」『平家物語長門本』（名著刊行会、一九七四年）

「四部合戦状本」『四部合戦状本平家物語』（一九六七年、大安）及び「四部合戦状本平家物語巻四」（『文学』一九六六年十一月）

「源平闘諍録」『源平闘諍録と研究』（未刊国文資料刊行会、一九六三年）「南都本」『南都本・南都異本平家物語』（汲古書院、一九七二年）なお、荒木繁氏による幸若舞『敦盛』解題（平凡社東洋文庫、一九八三年）を参考にした。

（4）以下のテキストを使用した。

1『百二十句本平家物語』（汲古書院、一九七〇年）2『平家物語〈百二十句本〉』（古典文庫、一九六八～六九年）3『小城鍋島文庫本平家物語』（汲古書院、一九八二年）4『八坂本平家物語』（臨川書店、一九八一年）5『岡山大学本平家物語』（福武書店、一九七五～七七年）

6『平家物語竹柏園本』(八木書店、一九七八年) 7『平松家旧蔵平家物語』(古典刊行会、一九六五年) 8『鎌倉本平家物語』(汲古書院一九七二年) 9『平家物語』(日本古典文学刊行会、一九七三〜五七年) 10『高野本平家物語』(笠間書院、一九七三〜七五年) 11『真字熱田本平家物語』(尊経閣叢刊、一九四〇年) 12『両足院本平家物語』(臨川書店、一九八五年) 13『平曲正節』(大学堂、一九七四年) 14『平家物語波多野流節付語り本』(勉誠社、一九七八年) 15『平家物語前田流譜本』(早稲田大学出版部、一九八五年)

(5) 本文は(3)と同じ。

(6) 大曽根章介・堀内秀晃「新潮日本古典集成『和漢朗詠集』」(新潮社、一九八三年)に拠る。

(7) 山田昭全「狂言綺語観」『平家物語研究辞典』(明治書院、一九七〇年)

(8) 本文は覚一本に拠る。

(9) 本文は『続群書類従十九輯上』に拠った。

(10) 本文は『群書類従十九輯』に拠った。

(11)『日本古典文学大辞典』(岩波書店、一九八三〜八四年)「教訓抄」(植木行宣)「懐竹抄」(石田百合子)

(12) 本文は『兵庫県史 史料編』に拠った。

(13) 本文は日本古典文学大系『謡曲集 上』(岩波書店、一九六〇年)に拠った。

(14)『いろは作者注文』等

(15) 後藤康宏「『須磨寺笛之遺記』と『小枝の笛物語』をめぐって」(『伝承文学研究』三十一号、一九八五年)

(さや まきと)